



大阪+知的障害+地域+おもろい=創造

## 知の知の知の知

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所情報誌通算 3747 号 2017.6.30 発行

ただ1人の母として



NHK ニュース 2017年6月28日

ある夫婦に赤ちゃんが生まれました。結婚して2年、待望の赤ちゃんでした。しかしある理由でその子どもに合う服は、どこにもありませんでした。子どもにしてあげたいと思っていたこともほとんどできませんでした。でもお母さんは諦めませんでした。希望を服作りにかけた母の物語です。(ネットワーク報道部・宮脇麻樹記者)

### 初めての出産 手作りの子ども服

7年前、2010年の6月8日、東

京都に住む奥井のぞみさんはふるさとの病院で初めての出産に臨んでいました。結婚して2年、待望の赤ちゃん。「かわいい服を着せたい」と、ベビー服や小物を手作りしていました。ミシンを買い、退院やお宮参りの時に着せるベビードレスも作っていました。その服が着られなくなるとは思っていませんでした。

### 心臓停止

出産を間近に控えたころ、陣痛がうまくおこらず、帝王切開をすることになったのです。その直後、「心臓の音が聞こえません」と看護師が言いました。のぞみさんは大きな病院に運ばれて帝王切開で出産。赤ちゃんの心臓は21分間止まっていたことをあとで知りました。命は守られましたが脳性まひと診断されました。

### おっぱいもあげられない、服も着させられない

生まれた男の子は「伊吹」と名付けられ集中治療室に入りました。人工呼吸器をつけ、看護師の立ち会い無しには触ることもできません。ひとり、子どもがいない家で搾乳して母乳を病院に届ける日々。その母乳は伊吹くんの口ではなく胃につながったチューブに注がれました。



思い描いていた育児と大きく違った生活。肌着を着るようになって小さな腕には点滴がついていて、袖がうまく通せません。服に触れて、針がずれると点滴が漏れ、腕がぼんぼんに腫れました。「痛い」と言うことができない伊吹くん。のぞみさんは伊吹くんに触れなくなりました。作ったベビードレスも、着せられず伊吹くんの体の上にそっと置いて写真を撮っただけ

でした。

出番のなかったベビー服 体の上に置いて写真を撮った

### 子どものために子どもに似合う服を

子どものためできることはないか。のぞみさんが考えたのは伊吹くんのための服を作ることでした。“この子にあったこの子のためだけの服を作れるのは、ただ1人の母の自分だけ”。伊吹くんは、人工呼吸器のほか、胃に直接栄養をおくる胃ろうもつけていて首も座っていません。脱力している腕に袖を通して、両肩が脱臼したこともあります。のぞみさんが最初に作ったのは点滴などの邪魔にならないよう肩の辺りでボタンで外すことができる肌着でした。首や腕を通さずに着せられる、1枚の布のような肌着。安全に着替えができる



ように考えたのです。その後、次々と伊吹くんの服を作るようになりました。

### 初めて作った肌着を着せて

### できないことばかりの中で

刺しゅうをつけてみたり、弟の服とおそろいにしてみたり。おしゃれに見えるよう心がけました。「息子は声も出せないし、コミュニケーションも取れない。一緒に遊んだり、お菓子を作ってあげたりすることもできない。母親としてできることが洋服作りでした。似合う服、自分が着せたい服を着ると、息子の表情もよく見えたのです」。のぞみさんはそう話していました。

### 弟とおそろいの服を着て

### 協力を得て安全な服

そしてのぞみさんは合う服のない病気や障害のあるほかの子どものために、病気や事故などで突然、介護に直面した家族の心の負担を減らすた



めに、服を作りたいと考えるようになりました。その服を「病児服」と名付け、伊吹くんのイブに、画材のパレットのように好きな色を使えるという意味を込め「palette i b u. (パレット・イブ)」という名前で販売することにしたのです。

### 病児服 (撮影 三島史子)

病児服は自分が作った1枚の布になる服をベースに、マジックテープやスナップボタンを使い、人工呼吸器をつなげたままでも着せられるようにしました。子どもの体を大きく動かさなくてもすむため、着替えに伴う脱臼や骨折のリスクも減らすことができ



ます。工場や、ハンドメイド作家の協力も得て、今月中旬から注文を受け付け肌着やドレスなどをインターネットで販売しています。

### 絵を描けなくなったイラストレーター

病児服の取材を続けていると、絵が描けなくなったイラストレーターの方に出会いました。宮田敦子さんです。娘の麗衣奈さん（7）は、原因不明の脳障害があり、胃ろうをつけています。



出産する前、子どもの絵をたくさん描いてきた宮田さん。ところが、麗衣奈さんを出産したあとは、描けなくなってしまいました。「歩いている」、「水着で遊んでいる」そうした子どもの姿が「麗衣奈さんができないこと」だと感じ、大好きな絵にするのがつらくなったのです。

### のぞみさんの依頼

しかし、のぞみさんから病児服のリーフレットのイラストを描いてほしいと言われた時、その「病児服」への思いを聞いて、着替えを楽しみにする様子が頭に浮かび、「描ける！」と思ったと言います。

リーフレットの子どもは人工呼吸器をつけていたり足に装具をつけていたり。それは伊吹くんや麗衣奈さんをイメージして描いたイラストです。宮田さん自身も麗衣奈さんの服選びで大変な思いをしたことがあり、「『これしか着られない』ではなく、子どもにとって明るくかわいい服を親が選べるのが大事」と感じていると言います。

ibu.made  
カバーオール  
ハンドメイド作家による1点モノ  
SIZE 85/100/120

Palette ibu.

ibu.formal  
Palette ibu.  
ワンピース・ドレス・スーツなど  
ハンドメイド作家による手作りやリメイク

ibu.コモノ  
ぬくぬく前掛け  
吸引チューブ袋  
PEGカバー

この洋服似合うかな？  
この洋服着てどこに出かけよう？

医療面に配慮した機能性って？  
○人工呼吸器をつなげたままでも

### 着せたい服

今回、取材の中で重い障害がある子どもを育てるお母さんたちに、子ども服の話を聞きました。硬直している体に合わせて既製の服の手直しをテーラーに頼んでいる人、また自分でリメイクしている人など、さまざまでした。共通していたのは、「『着られる服』ではない。子どもに『着せたい服』を着させてあげたい」という思いでした。「かわいい服を着ていると、周りの人たちに声を掛けてもらい、子どもが嬉しそうにしている」そう話すお母さんもいました。

たかが服だけど…

たかが服、と思う人もいるかもしれませんが、でも、早産で手のひらに乗るような854グラムの子どもを出産した私。退院する時、市販の一番小さいサイズの洋服を着させても袖から手が出ないほどぶかぶかで、その姿をじっと見た時、服が子どもの小ささを際立たせているように感じ、小さく産んでしまった自分をひたすら責めていました。「子どもの体にあった、親が着せたい服を着せてあげたい」。そう思っていました。たかが服だけど、されど服。今回取材したお母さんたちの言葉を聞き改めてそう思いました。

## パラリンアートカップ2017 アートで夢を叶える 齊藤寛子

朝日新聞 2017年6月28日



パラリンアートカップの審査員を務める北沢



豪さん(右端)やセルジオ越後さん(右から2番目)ら=東京都千代田区

障害のある人たちによる絵や書、版画などの芸術作品のコンテスト「SOMPOパラリンアートカップ2017」(主催・一般社団法人障がい者自立推進機構など、メディアパートナー・朝日新聞社など)の作品募集が7月1日から始まる。27日、審査員らによる開催発表会があった。

障害者の社会参加や経済的な自立が目的で、今回が2回目。作品は協力企業約

70社に貸し出されたり、ライセンス契約で印刷物に利用されたりして、利用料が作者の収入になる。

募集作品のテーマは「サッカー」と「バスケットボール」。前回に続き審査員を務める漫画「キャプテン翼」の作者、高橋陽一さんは「前回は何れも自由な表現が伝わってくるものばかりだった。コンテストの場が自分を表現する場になるようお手伝いしたい」と話した。高橋さんの選ぶ「キャプテン翼賞」を前回受賞した自閉症の大塚エティエン君(10)の母郁子さんは「受賞が自信になった」。高橋さんは「色使いや布を貼った表現は、自分にはできないもの。刺激を受けた」とたたえた。

## 不審者から入所者を守る 福祉施設で侵入対応訓練 奈良 産経新聞 2017年6月28日

昨年7月に相模原市の障害者施設で入居者19人が刺殺された事件を受け、奈良署は奈良市の重症心身障害児の入所施設「バルツァ・ゴードル」で、不審者侵入対応訓練を行った。参加した施設職員や警察官らは真剣な表情で取り組んだ。

22日に行われた訓練は、不審者1人が正面玄関から侵入し、ナイフを振り回して職員を切りつけた一との想定で実施。不審者が「みんな殺したる!」と叫ぶと、気付いた職員が緊急事態の発生をボタン1つで警察に伝える「非常通報装置」を押し、別の職員2人がさすまたを使って応戦。通報を受けて駆けつけた警察官が不審者を取り押さえた。

非常通報装置は、押すと警察からすぐに折り返しの電話がかかってくる仕組みで、相模原市の障害者施設殺傷事件後、全国で導入が進んでいる。同署によると、県内では同施設を含め2施設の設置にとどまっているという。

訓練に参加した同施設の事務長、水嶋豊さん（43）は、「皆の命を守るために、今後も職員全体で取り組む必要がある」と気を引き締める。同署生活安全課の梅崎一郎・防犯アドバイザー（59）は、「相模原の事件では通報が遅れたことも被害の拡大につながった。非常通報装置をほかの施設にも普及させることが急務だ」と話した。

#### **淫行 知的障害ある少女に施設職員 容疑で逮捕 神奈川 毎日新聞 2017年6月28日**

知的障害のある少女に淫らな行為をしたとして、神奈川県警少年捜査課などは28日、同県寒川町宮山、障害者通所支援施設の児童支援員、山口隆央容疑者（39）を児童福祉法違反（淫行（いんこう）させる行為）容疑で逮捕した。

#### **臨時職員が知的障害者に強制わいせつの疑い 福岡県 共同通信 2017年6月28日**

福岡県警春日署は28日、勤務先で知的障害のある女性の体を触ったとして、強制わいせつ容疑で福岡市南区日佐、元障害者施設臨時職員の一ノ宮健士容疑者（68）を逮捕した。容疑を一部否認しているという。

逮捕容疑は14日夜、勤務先だった福岡県春日市の障害者施設内で、通所していた福岡市在住の30代女性の胸を触るなどした疑い。

春日署によると、一ノ宮容疑者は昨年4月から勤務し、夜間の巡回や清掃などを担当。14日夜、施設には被害女性を含めて利用者が3人いたが、職員は他にいなかった。

女性からの申し立てを受けた施設側は同日中に署へ通報。その後、一ノ宮容疑者を解雇した。

#### **車いすから降り自力でタラップ上る バニラ・エアが謝罪**

NHK ニュース 2017年6月28日

今月、格安航空会社のバニラ・エアを利用した車いすの男性が、鹿児島県の奄美空港で車いすから降りてタラップの階段を腕の力で自力で上っていたことがわかりました。当初、男性は同行者に車いすごと担いでもらって上ろうとしたところ、転落の危険があると制止されたということで、バニラ・エアは、不快な思いをさせたとして謝罪しました。

バニラ・エアなどによりますと、今月5日、鹿児島県奄美市の奄美空港発、関西空港行きの便で、車イスを利用している大阪・豊中市の木島英登さん（44）が、同行者に車いすごと担いでもらってタラップの階段を上ろうとしたところ、航空会社の空港のスタッフが「転落する危険があり、規則で禁止されている」と制止しました。

木島さんはタラップの段数も多く、同行者の友人に両脇を支えてもらって上るのは困難だと判断し、車いすから降りて腕の力を使って一段一段自力で上ったということです。

奄美空港には車いすの乗客が座った状態で航空機に乗り降りできる設備はなく、航空会社では、タラップの階段は、同行者やスタッフが補助して上り下りすることを想定していたということです。

バニラ・エアは、男性に対し「不快な思いをさせた」として、直接、謝罪し、29日から奄美空港に、車いす用の階段の昇降機を導入する予定だということです。

バニラ・エアは「お客様にご不便をかけ、また、不快な思いをさせまして深くおわびします。今後、このようなことがないように搭乗のサポートを徹底します」と話しています。

#### **階段を自力で上った男性は**

奄美空港でタラップの階段を自力で上ったという大阪・豊中市の木島英登さんがNHK

の取材に応えました。

木島さんは足が不自由で車いすを利用していますが、今月3日、関西空港でバニラ・エアの奄美空港行きの際に乗るため搭乗手続きをしていたところ、奄美空港では飛行機から降りる際にタラップを利用することを告げられ、「歩けない人は乗れない」と言われたということです。

このため、木島さんは「同行する友人の手助けでタラップを下りる」と伝えて搭乗し、奄美空港では、友人4人が車いすごと担いでタラップを下りたということです。

その2日後の今月5日、木島さんが、奄美空港でバニラ・エアの関西空港行きの際に乗ろうと手続きをしていた際には、職員から「同行者が車いすを担いでタラップを下りたのは会社の規則違反だった。同行者の補助で階段を上れるなら搭乗できる」と言われたということです。

このため、木島さんは、車いすでタラップの前まで行き、友人に車いすごと担いでもらって上ろうとしましたが、改めて制止されたということです。

木島さんは、タラップの段数も多く、友人に両脇を支えてもらって上るのは困難だと判断し、車いすから降りて腕の力を使って一段一段自力で上ったということです。

木島さんは「歩けない人は乗れないと言われたのは驚きで、差別だと思う。設備を完全にするのは難しいと思うが、できる範囲で努力してもらいたい。今回の件は、相談した行政やバニラ・エアが対応してくれて解決してよかった」と話していました。

#### **障害者搭乗時の航空各社の対応**

車いすを利用する人や体に障害がある人が航空機に搭乗する際、航空各社では、リフトなどの設備を活用したりスタッフが抱きかかえたりして、可能なかぎり搭乗できるよう対応しているとしたうえで、快適な利用のためにも事前に連絡してほしいと呼びかけています。

このうち、日本航空は、車いすに乗ったまま乗り降りできるリフトなどの設備がない空港では、スタッフが体を抱きかかえて搭乗をサポートしているということです。また、小型の機材で客室乗務員が1人しかいないようなケースでも、スタッフを増やしたり乗客に協力を呼びかけたりして対応しているということです。

また、全日空は、リフトやストレッチャーなどの補助器具を各空港に備えているほか、スタッフが抱きかかえて支援する場合もあるということです。

格安航空会社のジェットスター・ジャパンやピーチ・アビエーションは、いずれの空港でも、リフトなどの設備を使ったりスタッフが抱きかかえたりして搭乗をサポートしているということです。

ただ、いずれの航空会社も、乗客の体調や緊急脱出時の支援要員が確保できないことなどで搭乗を断らざるをえないケースもあるとしています。

一方で、どのような支援が必要か事前に把握できれば、タラップを使う必要がない到着スポットに航空機を振り分けたりスタッフを増やしたりできるため、快適な利用のためにも予約時などに事前に申し出てほしいと話しています。

#### **ネット上での議論が盛んに**

ツイッターなどのソーシャルメディアには、「サービスを提供する会社としてどうなのか」とか、「酷すぎて言葉が出ない。人に身体的・精神的苦痛を強いることが暴力だとなぜわからないのか」などと、航空会社側の対応を非難する投稿が相次ぎました。

一方で、「車いすの利用者は事前に航空会社に連絡したほうがスムーズに対応してもらえるのではないか」という意見も数多く見られました。

こうした指摘について、「公共交通機関は事前申請なく、すべての人が乗り降りできるのが理想だね」というコメントが寄せられたほか、障害のある子どもがいるという親の1人も「事前確認は当然ですが、いつでもどこでも健常者と同じ待遇をしてもらえるのが望む姿です」と書き込むなど、ネット上での議論が盛んになっています。

#### **専門家「国も指針作り対策の徹底を」**

日本人として初めて国連の障害者権利委員会の委員に選ばれ、障害者政策に詳しい静岡県立大学の石川准教授は「車いすを利用している足が不自由な人に、手を使って1人でタラップを上らせるような事実があったことは極めて遺憾だ。障害者差別解消法は、航空会社などの民間事業者は障害のある人からの求めに応じて対応に努めるよう定めている。仮に車いすの男性が支援が必要なことを事前に伝えていなかったとしても、サポートできる人が全くいなかったはずはなく、あまりにひどい対応だ」として、航空会社側の対応に問題があったと指摘しています。

そのうえで、石川教授は「民間事業者の独自の判断によって障害者がサービスを拒否されたり制限されたりする差別を受けることがないよう、国も指針を作るなど対策を徹底する必要がある」と話しています。

### 障害者とアイスホッケーで交流 早稲田中・高の生徒12人 東京新聞 2017年6月28日 早稲田ジュニアアイスホッケークラブのメンバー



アイスホッケーで社会貢献をしたい、と早稲田中学・高校（新宿区馬場下町）に通う生徒たちでつくる「早稲田ジュニアアイスホッケークラブ」が、スケートリンクでの障害者との交流会を企画した。八月の本番を目指し、障害の程度に合わせたプログラムを練っている。

クラブのメンバーは、高校生十人と中学生二人。普段は、校内で筋力トレーニングをしたり、学校近くのスケートリンクで滑走をしたりし、休みに東大和市のリンクに出かけてホッケーの練習をしている。

交流会は、キャプテンで高校三年の海老江紫悦（しのぶ）さん（18）＝荒川区＝が発案した。昨年のリオ五輪・パラリンピックで、パラ大会の報道が五輪に比べて少ないことに気がついたことがきっかけ。「自分たちの関心が低いことに原因があるのでは」と思い至った。

海老江さんは、小学校時代の苦い思い出がある。知的障害のある同級生がからかわれていたとき、かばったりしなかった。「きっと傷ついていたと思う」と後悔している。「自分をキャプテンとして成長させてくれたアイスホッケーを通じて障害者のために何かしたい」と思った。

荒川区の社会福祉協議会に相談して企画した交流会は、西東京市のダイードリンコアイスアリーナが会場。知的障害者や車いす利用者ら十五人ほどを招く。自分で滑るのが難しい人のためには椅子型のソリを用意し、後ろから押して氷上を滑る気持ちよさを感じられるようにする。慣れた人には、スティックでシュートを打ってもらう。

提案に、チームの仲間は「やろう」とすぐに賛成してくれた。副キャプテンの大森基信さん（18）＝練馬区＝は「他人のためによいことができるなんて、すごいことだと思った」と話す。メンバーは障害者と関わったことがない。本番までに都多摩障害者スポーツセンター（国立市）などでボランティア活動をして、経験を積む予定だ。

海老江さんたちは、インターネットで資金を募るクラウドファンディングサイト「レディーフォー」で支援を呼び掛け、三十万円の目標額を達成した。募集は七月十四日まで。

（石原真樹）

### バリアフリー撥水白装束 中能登 車いすでも滝行OK 中日新聞 2017年6月29日

中能登町で官民が連携してバリアフリー商品の開発に取り組むNAKAN（ナカン）は、車いす利用者でも滝行ができる白装束を三着作った。七月一日に町内の観光地を巡るバリアフリーツアーで、不動滝（井田）の滝行体験に使ってもらう。（松村真一郎）

## 1日に不動滝で着用

ナカンは、町の基幹産業の繊維業を活用し、障害者や高齢者のニーズに応えるためのプロジェクトチーム。町企画課や町商工会、能登繊維振興協会、女性団体崇神遊の会などで昨年十二月に発足した。



NAKANが開発した車いす利用者用の白装束＝中能登町で(町提供)

毎年七月に滝開きが行われる不動滝で、車いす利用者でも滝行ができるようにしたいと、今回オリジナルの白装束を作った。ポリエステルを特殊な薬剤で加工し、高い撥水(はっすい)性を実現。利用者の中にはおむつを着用している人もおり、下着がぬれないようにするインナーも作った。

町では、障害者や高齢者に対する物理的、心的バリアフリーに取り組むプロジェクト「障害攻略課」が四月に発足し、町ぐるみでのバリアフリー化に取り組む。不動滝では五月、車いすの悪路での走行を助ける補助輪も導入した。

一日のツアーには、七人の車いす利用者が参加して滝行を体験する予定。

町の担当者は「実験を重ねて、水の入り具合を工夫した。今後は販売も検討したい」と話している。

## <ふうどばんく>障害者の就労支援開始

河北新報 2017年6月29日

障害者の就労支援を始めたふうどばんく東北AGAIN＝富谷市

生活困窮者に食料品を提供する富谷市のNPO法人ふうどばんく東北AGAIN(あがいん)が、「就労サポートセンターあがいん」を開所して障害者就労移行支援事業に乗り出した。フードバンク団体が就労移行支援を行うのは全国で初めてという。

5月に開所した就労サポートセンターは定員20人で、最大2年間利用できる。現在40代の男性1人しかおらず、法人は利用者を募集している。関わる業務は企業や個人から寄贈された食料品の仕分け、配送、事務といったふうどばんく東北の事業全般にわたる。

5月初旬から週3日通所する男性は、ふうどばんく東北のスタッフと共に食料品の受け取りや配達、在庫整理などを担当する。外部とのコミュニケーションが多く、「やりがいがある」と話しているという。

法人の白木福次郎理事は就労移行支援事業の経験が豊富なNPO法人ほっぷの森(仙台市)の理事長を務める。ほっぷの森のノウハウを生かして履歴書の書き方や面接の受け方といった座学も用意し、利用者は個性に合ったメニューを組むことができる。

就労サポートセンターの小椋亘管理者は「フードバンク活動は誰かの役に立つという実感を得やすい。復職や就労に向け、ここでの経験を自信につなげてほしい」と語る。

連絡先は就労サポートセンターあがいん022(779)7150。

月刊情報誌「太陽の子」、隔月本人新聞「青空新聞」、社内誌「つなぐちゃんベクトル」、ネット情報「たまにブログ」も

